

〔巻頭言〕

大塚晃教授退職記念特集によせて

社会福祉学科長

岡 知史

大塚晃教授は、2008年4月に本学科に障害者福祉および児童福祉を専門とする教授として着任されました。2018年度に定年退職を迎えられた後も、2019年度は特別契約教授として勤務され、11年の長きにわたって本学科の教育・研究のために多大な貢献をされました。特に2011年度から2014年度まで4年間（2期）は学科長として、本学科の発展のために努めていただきました。学科内だけではなく、大学全体で取り組んでいるソフィアオリンピック・パラリンピックプロジェクトでは、全学共通科目「共生社会創生論：障がい者スポーツ・芸術を通した共生社会の実現に向けて」を担当され、共生社会の実現するために貢献されました。ここに厚くお礼申し上げます。

大塚先生は本学科では、障害者福祉、児童福祉という現代日本の社会福祉の柱になる二つの分野を一人で担当されていました。また長く施設職員として福祉現場での実践経験を積まれてから、厚生労働省にて制度政策づくりに専念されました。まさに福祉を直接に実践するミクロな場面から、国全体の福祉をデザインするマクロな場面まで非常に広く、社会福祉の現状を熟知されている先生の存在は、上智大学社会福祉学科の研究と教育を推進する上でとても大きな力になっていました。このようなご経歴から、本学科では福祉政策運営管理科目群と福祉臨床科目群に分類され、原則として福祉臨床科目群を担当する教員が、社会福祉実習も担当するという仕組みになっているのですが、大塚先生は例外的に主として福祉政策運営管理科目を担当されながらも、社会福祉現場実習をスーパーバイザーとして学生を指導されてきました。

このように担当分野も広く、福祉臨床から福祉政策まで語ることができる大塚先生のゼミには、当然のごとく多くの学生が集まりました。ある年度には、大塚ゼミに学生が多く集まりすぎる結果になり、懐の深い大塚先生はそれでも良いと考えていらっしゃるかもしれませんが、後任学科長である私からゼミの人数を少しでも減らしていただきたい旨、お願いしたこともありました。同様の理由から、大塚先生の指導で修士論文執筆のための研究をしたいという大学院生も非常に多かったようです。

ところで大塚先生が初めて本学に教員として来られた2008年度のことで私がよく覚えていることが三つあります。一つは4月の新入生を迎えてオリエンテーション・キャンプに行っ

たときのことです。先生は宿舎の前の、広く開けた芝生の上に一人で座り、何かを長く考えていらっしゃる様子でした。私は先生が本学の哲学科出身の方だと存じ上げていたので、哲学的な思索に没頭されているのだろうかと思っていました。あるいは先生がかつて上智大学の学生として参加したオリエンテーション・キャンプに、こんどは教員として参加することになったことについて、いろいろ考えられていたのかもしれませんが。二つめは、先生のご指導のもとで卒業論文のための研究をしていた学生が、なかなか論文執筆が進まず、先生はとても悩まれていたことです。「それは、学生の自己責任なんですから、そこまで悩まれなくてもいいのでは」と、若輩の私からわざわざ申し上げたほどです。三つめは、やはり2008年度の謝恩会のスピーチのとき、大塚先生は学生たちから受けた感謝の言葉に、非常に感動されていたことです。その先生の感動ぶりに、見ていた私のほうが感動してしまったほどでした。先生の学生への熱い思いを垣間見ることができた瞬間でもありました。

大塚先生のごこれまでの本学科の教育と研究へのご尽力に感謝するとともに、今後のご活躍とご健勝をお祈りし、これからもご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます次第です。